



Title	自習型CALL教材を用いた外国語教育の可能性
Author(s)	奥, 聡; OKU, Satoshi; 河合, 靖 他
Citation	高等教育ジャーナル, 11, 85-92
Issue Date	2003
DOI	https://doi.org/10.14943/J.HighEdu.11.85
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28797
Type	departmental bulletin paper
File Information	11_P85-92.pdf



自習型 CALL 教材を用いた外国語教育の可能性

奥 聡^{1)*}, 河合 靖¹⁾, 久保 美織²⁾, 栗原 豪彦¹⁾,
鈴木 志のぶ¹⁾, 野坂 政司³⁾

¹⁾北海道大学言語文化研究科, ²⁾北海道大学国際広報メディア研究科,
³⁾北海道大学情報メディア教育研究総合センター

Toward Foreign Language Education Assisted by a Self-training Computer Program

Satoshi Oku,^{1)**} Yasushi Kawai,¹⁾ Miori Kubo,²⁾ Takehiko Kurihara,¹⁾
Shinobu Suzuki,¹⁾ and Masashi Nosaka³⁾

1) Institute of Language and Culture Studies, Hokkaido University,
2) Graduate School of International Media and Communication, Hokkaido University,
3) Center for Information and Multimedia Studies

Abstract The purpose of this paper is to report a case study of English education assisted by a self-training computer program at Hokkaido University. The results of the study suggest that the self-training computer program can improve the students' listening skills. The report also reveals that the students see both positive and negative sides of the class using the program. One of the typical positive responses is that many students appreciate the system in which they can study at their own pace. A representative negative aspect is that it is not very easy for many students to maintain their motivation while they are working on the self-training computer program. The report and discussion by the instructors will reveal the advantages and disadvantages of this system at the present stage of language education at Hokkaido University, and several problems to be solved to use this type of education system most effectively.

(Revised on June 21, 2002)

*) 連絡先 : 060-0817 札幌市北区北17条西8丁目 北海道大学言語文化部

**) Correspondence: Institute of Language and Culture Studies, Hokkaido University, Sapporo 060-0817, JAPAN

1. はじめに

本稿の目的は、自習型CALL教材を用いて行った英語授業の実施内容・教育効果を報告するとともに、実際の授業運営を通して明らかになった今後の課題・展望を考察することにある。北海道大学言語文化部英語教育系では、必修選択授業として英語IIIをスピーキング、リスニング、リーディング、ライティングの4つの技能別クラスに分け、学習者が自分の興味に応じた授業を受講できるようにしている。今回、調査の対象となった授業は、平成12年度に開講された英語IIIのリスニング授業の一部である。調査の結果明らかになったことは、聞き取り標準テストの形式に沿った自習教材を取り入れたCALL授業においても、有意な成績の向上が見られるということである。すなわち、少なくとも標準テストのリスニング力向上という特定の目的に関しては、自習教材を積極的に取り入れた授業にも十分な教育効果があったといえる。また、受講者アンケート及び授業を実施した授業担当者の授業後の検討から、外国語授業に自習型CALL教材を導入することの利点や、授業を運営して行く上でのさまざまな課題が明らかになった。以下では、それらを順次紹介してゆく。(注1)

2. 調査のデザイン

2.1 調査の目的

英語IIIリスニングクラスで、英語聞き取り標準テストの形式に沿った教授方式(自習CALL使用型)がそうでない方式(従来型)に比べ、標準テストの結果に違いをもたらすかどうかを探る。また、自習型CALL教材使用による教授方式に対する学習者の反応をみる。

2.2 調査の方法

従来型の英語リスニングクラスと自習CALL使用型のクラスに、標準テストの形式に沿った事前テストと事後テストを実施(CELT試験(注2)を使用、58点満点)すると同時に授業についてのアンケートを実施した。

2.3 対象クラス内訳

平成12年度第1学期

従来型授業：授業担当者3名、4クラス

自習CALL使用型授業：授業担当者5名、8クラス
平成12年度第2学期

従来型授業：授業担当者4名、6クラス

自習CALL使用型授業：授業担当者5名、8クラス

2.4 使用CALL教材および使用環境

教材は、アルク社の英語学習システム「ALC NetAcademy」を使用した。これは、いわゆるネット型の自習教材である。北大の情報教育館3Fのサーバ編集室内に専用のサーバを置き、教材データベース、受講者管理データベースがそこで管理される。登録された受講者がサーバにアクセスして、教材の配信を受け、各自で学習をするというシステムである。ライセンスの関係上、平成14年度6月現在、この教材が利用できるPCは、情報教育館3Fの言語教育用マルチメディア教室の40ブースと自習室の12ブースのみ。教材の内容は、「リスニング強化コース」50ユニットと「リーディング強化コース」50ユニット(それぞれの5段階のレベルに分かれている)、および「TOEICテスト演習コース」(本試験の5分の1スケールの模擬試験)10ユニットからなる。調査対象とした授業は、上述の英語IIIのリスニングクラスで行われたものであるので、「リスニング強化コース」を中心に利用した。

なお、情報教育館の当該の2教室は、平日の午前8時から午後9時まで利用できる。その間、12ブースの自習室はいつでも利用でき、また、40ブースの教室も授業で使われているのは週11~13コマ程度であり(注3)、その他の空き時間に自由に自習に利用できる。

2.5 授業の方法

自習型CALL教材を利用した授業を行った授業担当者は、第1学期第2学期合わせてのべ10名である。基本的な授業のデザインは共通しており、毎回、授業担当者による授業(解説説明・講義、小テストなど)を20~30分、ALCの自習教材による学習者の自主練習60分程度、という形式であった。さらに、授業時間以外のALC教材による自習も積極的に促した(一定以上の時間の自習を授業以外に、行うことを課題として与えた授業担当者もいた)。

2.6 調査項目

(1) 事前テストに比較して事後テストの得点には向

上がみられるか。得点の向上が見られる場合、教授方式の違いによって標準テストの得点向上度に差が見られるか。(2)授業への評価で従来型クラスと自習CALL使用型クラスに差は見られるか。また、どの項目が得点の向上に関係しているか。(3)自習型CALL教材使用による教授方式に対する学習者の反応はどうか。

なお、第1学期に使用したCELT試験のための録音テープの音質が最良の状態ではなかったため、第2学期には、同じ内容のテープを新しく録音し直したものをを用いた。したがって、第1学期と第2学期では、テープの質という条件にやや差ができた可能性があったため、分析は学期別に行った。なお、統計学的検討では、 $p < 0.05$ を有意水準とした。

3. 調査結果：問い(1)～(2)

3.1 第1学期

(1)事前テストに比較して事後テストの得点に向上が見られるか：従来型クラスの学習者(回答数124)の事前、事後テスト得点差に関して、対応のあるt検定を行ったところ、有意な得点の向上を認めた。(t値 = 1.98, $p = 0.05$, 得点差の平均値 = +1.12点, 標準偏差 = 6.29)。自習CALL使用型クラスの学習者(回答数259)についても、それが有意であることが示された(t値 = 7.05, $p = 0.00$, 得点差の平均値 = +2.63点, 標準偏差 = 6.01)。

教授方式の違いによって得点の向上に差が見られるか：次に、従属変数を[事後テストの得点 - 事前テストの得点]、独立変数を教授方式(従来型か自習CALL使用型か)としてt検定を行った。その結果、教授方式の違いは得点の向上に有意な差があることが示された(t値 = -2.27, $p = 0.02$)。すなわち、自習CALL使用型クラスの学習者の得点の伸びは、従来型クラスの学習者の得点の伸びよりも大きなものであることが認められた。

ここで注意すべきは、従来型クラスと自習CALL使用型クラスで担当者が異なるため、教授方式の違いによる効果は実は授業担当者の違いによる効果である可能性も否定できないという点、また、自習CALL使用型クラスの自習教材は、その内容が標準テストの得点向上に特化されたものであったのに対して、従来型の授業では、より広い意味でのリスニング力(英語力)向上を狙ったものであり、標準テストの成

績向上だけに目的が特化されていたわけではないという点である。

(2)授業への評価で従来型クラスと自習CALL使用型クラスに差は見られるか：アンケートは1 = 強く思う ~ 5 = 全くそう思わないの5段階の尺度を用いた。すべての項目のうち、質問B(「この授業を受ける前と現在の自分の英語リスニング能力を比較すると、それは向上したと思う」)のみについて自習CALL使用型クラスは従来型クラスより有意に高く自分のリスニング能力を向上したと感じていることがt検定によって示された(従来型クラス回答数90, 平均値 = 2.67, 標準偏差 = 0.82, 自習CALL使用型クラス回答数 = 206, 平均値 = 2.88, 標準偏差 = 0.82; t値 = 1.96, $p = 0.05$)。他の共通項目(下記参照)について教授方式の違いによる有意な差は認められなかった。

得点の向上に関係が見られた項目：自習CALL使用型クラスについてはアンケート項目のうち、上記Bと得点の向上に有意な正の相関があった(回答数82, 相関係数 $r = 0.18$, $p = 0.02$)。自分の聞き取り技術の向上を学習者が主観的に感じることができたと考えられる。

3.2 第2学期

(1)事前テストに比較して事後テストの得点に向上が見られるか：従来型クラスの学習者(回答数194)の事前、事後テスト得点差に関して、対応のあるt検定したところ、有意な得点の向上を認めた。(t値 = 5.52, $p = 0.00$, 得点差の平均値 = +2.30点, 標準偏差 = 5.81)。

自習CALL使用型クラスの学習者(回答数257)についても、同様の結果が示された(t値 = 9.57, $p = 0.00$, 得点差の平均値 = +3.53点, 標準偏差 = 5.91)。

教授方式の違いによって得点の向上に差が見られるか：従属変数を[事後テストの得点 - 事前テストの得点]、独立変数を教授方式として分散分析(回答数451)を行った。その結果、教授方式の違いは得点の向上に有意な効果を示した(F値 = 17.22, $p = 0.00$)。すなわち、自習CALL使用型クラスの得点は、従来型クラスの得点よりも大きな向上が見られたと考えられる。

3.3 調査項目(1)～(2): 結果のまとめ

今回の調査結果から、少なくとも次のことがいえ

る。(i)ALCのNetAcademyを自習教材として積極的に利用した授業において、学習者の標準テストの成績は有意に向上する。(ii)また、こうした授業においては、学習者は自分の聞き取り能力の実際の向上を主観的にも感じることができていると考えられる。

北海道大学の外国語教育の責任部局である言語文化部にとって、自習型のCALL教材を導入する際の大きな懸念材料の一つに、教育効果の問題がある。つまり「コンピュータにまかせて、実力がつくのか？」という懸念である。今回の調査は、ごく限られた条件の下でおこなわれたものであるが、少なくとも標準テストに特化した形式のCALL教材に関して、リスニング能力の向上という点では、ポジティブな教育効果が認められるということを示していると考えられる。

では次に、このような自習型CALL教材を積極的に利用した授業を、受講生はどのように感じているかを見ることにする。

4. 受講生の反応：調査項目 (3)

4.1 質問事項と受講生の声

ここでは、まず、CALL授業を受講した学習者の生の声を、各質問項目についていくつか主なものを紹介する(明らかな字句の誤りなどは訂正してある)。

A. この授業は英語の聴解能力を向上させるための適切な情報・トレーニングを提供していた

- ・ コンピュータを使う意義が見出せない
- ・ 後半疲れて集中力低下
- ・ TOEICの教材を用いるのはよいが具体的にどうすれば聴解力の向上をのぞめるのかアドバイスがほしかった
- ・ 独習は手抜きしやすい
- ・ 教材としては良かった
- ・ 今までない試みで結構楽しかった
- ・ 自分のペースで勉強できるところは良い
- ・ 自分のレベルに合ったものを聞くことができた
- ・ 大学に入ってから初めて役に立った授業だった
- ・ 個人のペースで進めるところが良く、このような授業は初めてだった

(・ 文章中での発音変化を解説してもらえたのが良かった)^(注4)

B. この授業を受ける前と現在の自分の英語リスニング能力を比較すると、それは向上したと思う

- ・ 実感が無いので分からない

- ・ 半年くらい練習しても力はつかないと思う
- ・ 自分にとってレベルが高すぎて何度聞いても何を言っているか分からなかった
- ・ 向上したと思う
- ・ どちらかというとなり向上したかなと思う程度
- ・ 少し文章の流れがつかめるようになったが単に慣れただけかもしれない
- ・ 以前より良く聞こえるようになった

C. この授業を受ける前と現在の自分の英語学習全般あるいは英語リスニングに関する興味を較べるとそれは増した

- ・ 英語にはもともと興味が無いので変わらない
- ・ どちらかというとなりあきらかに変わった
- ・ パソコンを使って学習するのは面白かった
- ・ 現状維持
- ・ 興味というより必要性を感じた
- ・ 楽しく学習できた

D. この授業に対して自分が取り組んだ姿勢は評価できる

- ・ 集中力が続かずだらだらしてしまった
- ・ もっと意欲があったら自主的に進めることができた
- ・ 前半やる気があったが後半だれた
- ・ 自習は自分なりにがんばった
- ・ ノルマをこなすことはできたが授業以外にもやるべきだった

E. この授業で、CALLによる個人単位の練習部分とそれ以外の部分の割合は適切であった

- ・ 個人練習だけ毎週やっていると飽きてしまいそう
- ・ ちょっと張り合いが無い
- ・ CALLの文章を題材にして授業をしてほしい
- ・ CALLの部分の割合が多すぎる
- ・ CALLをもう少し減らし違う時間にやらせても良いと思う
- ・ もう少し教官の指導をしてほしい
- ・ 自習の時間が長い
- ・ もうちょっと先生[による指導時間]の割合が高い方が良いと思う
- ・ 私のようにできない人にとっては授業がもう少しあった方が良かった
- ・ 個人単位の練習だけでも良かった
- ・ 教官による説明はそれほど長くなかったけれどわかりやすくなった
- ・ 適切だと思う

- ・ (CALL以外の教材の)クイズに備えて, CALLだけでなく勉強するきっかけができた
- ・ 先生が黒板に書いて説明したところは非常にためになった
- ・ 教官の説明でいろいろ知ることができた
- ・ 適切だと思う

F. この授業がもしCALLによる個人単位の練習のみによって学習するクラス(担当教官は基本的に学習に介入しない)であったら自分はそのクラスを履修したい

- ・ そんなのはつまらない。教官の怠慢でしかない
- ・ そんな事をするならわざわざ大学に来る必要が無い
- ・ 単調な授業となりずっとは集中して行えないと思う
- ・ それなら授業として受けなくても良い
- ・ 多少は説明してもらいたい
- ・ パソコンだけだと同じ事の繰り返しで退屈する
- ・ 先生と一緒に学習する必要はある
- ・ 先生がいた方が良い
- ・ 多分楽だけどつまらない
- ・ 手抜きをすることが分かっているのであまり望まない
- ・ 普通のリスニングの方が手軽で良い
- ・ マイペースでよいのかもしれないが、飽きたり疲れたりするのでできればCALL以外の学習もしたい
- ・ もしCALLのみならその時間にする必要はない
- ・ それによって得られる単位に価値を見出せない
- ・ 授業に出席する人が減る
- ・ やはり教官からの説明があったほうが良い
- ・ 楽だけれど無味乾燥な授業だと思う
- ・ 履修したい。一人一人の学力の伸びは違うし勉強の仕方について困ることもない
- ・ 自分のレベルに合って進められるところは良い
- ・ それはそれで楽だと思う
- ・ 自分で好きなだけ勉強できるのは良い
- ・ CALLのみでも効果はあると思う
- ・ 自分には合っていると思う

G. CALL以外の担当教官との学習はためになった

- ・ 説明の時間が少し短かったと思う
- ・ 面白い時つまらない時もあった
- ・ 勉強になった
- ・ とてもためになった

- ・ 音声学は面白かった
- ・ CALLによる学習のみであれば自宅や図書館で行うことも可能だが教官のアドバイスが受けられるという点でこのクラスはためになった
- ・ CALLをやるだけでは分からない聞き取りのポイントがわかるので必要だと思った
- ・ クイズがよかった
- ・ コンピュータより先生の授業の方がためになった気がする
- ・ 教科書についての説明が面白くわかりやすかった
- ・ 分かりやすくよかった
- ・ いろいろ学べて楽しかった
- ・ コンピュータソフトだけでは人間の文化を肌で学習することはできないと思う

その他

- ・ ちょっと期待はずれだった。もっと画期的なシステムかと思った
- ・ パソコンを使った授業は目が疲れる
- ・ 時間が長くてパソコンに向かっているのも疲れた
- ・ ずっと集中してリスニングをしているのは無理だから小休憩がほしい
- ・ 授業中の自習時間が長かった。飽きるので30分くらいが良いと思う
- ・ CALLが単調で面白みに欠ける
- ・ 最初は熱心に自主的に学習していたが自分の聞きたいレベルのものがすぐになくなってしまった
- ・ パソコンでリスニングを勉強することは最初はすごく新鮮に感じて強い興味を持って勉強できたのだが、何回かやるうちに興味がうすれて来てしまった。無機質なものを相手にしている感じがすごくした
- ・ 個人練習なので仕方ないのかもしれないがあまり興味が持てなかった
- ・ ALCの話の内容に興味を引くものが少なかった
- ・ CALLによる評定は不真面目でもできてしまうので問題である(注5)
- ・ 授業に意欲的に参加していなかった気がする
- ・ リスニング中眠くなったが興味あるトピックであればじっと聞けた
- ・ ALCに3~4つくらいの教材が増えるともっと良い(注6)
- ・ もう少し実力の伸びを感じられるような機会を持ちながらやれると良いと思う
- ・ せっかくこういうスタイルの授業なのだから自宅

からもアクセスできた方が良いと思うし、その方が効率良く勉強できる。わざわざ大学まで来るのがつらい(注7)

- ・教材を多くこなすのと一つ一つじっくりやるのではどちらが能力の向上に役立つかについて迷った
- ・自分のペースでできるのが良かった
- ・教材はとても面白くしかも自分の力に応じた学習ができたのでやる気がでた
- ・宿題やレベルが適度で良かった
- ・ALCを使うのが今まで経験したことのないやり方で面白かった
- ・ALCの教材は内容が面白くこれからも利用したい(注8)
- ・CALLの学習は好きな時間にやりただけできるという点ですごく良い
- ・教材内容がおもしろかったので内容が知りたくて何回も聞いたりするとすこしずつ聞こえるようになるのが嬉しかった
- ・必死になってやれたので良かった
- ・こういう授業が多くできて多数の学生が選択できるようにしてもらいたい。

4.2 まとめ

学習者の反応に関しては、個々のアンケート項目の数的な処理は施していないが、全体として、このような授業の良い点と問題点とが、バランス良く指摘されていると考えられる。傾向としては、教材の内容や授業方法の目新しさも手伝って、興味をもって授業に参加し、また、自分のペースでできるという自習教材の長所を高く評価している学習者も相当数見られるが、その一方で、教師による解説・トレーニングも同時に必要であると感じている学習者も多い。自分でモチベーションを維持しつづけて、集中してやらなければ、緊張感が持続せず飽きてしまうという、自習教材の特性を、マイナスと評価している学習者も多いようである。もし、今後、完全自習型のCALL授業を導入することを検討してゆくのであれば、上で学習者がマイナス面として述べている事柄にどのように対処してゆくかが、重要な課題となるであろう。

5. 授業運営と今後の課題

以下では、自習型CALL教材を用いた授業の運営について、従来型の授業とは異なる点に焦点を置きながら、課題や問題点を明らかにして、今後、検討すべき材料を供することにする。

5.1 授業前の準備

授業の開始前に、いくつかの登録作業が必要である。まず、情報メディア教育研究総合センター(以下、情メセンター)にクラス登録を行う。センター利用者のIDを取得し、次にコース登録を行う。そして、受講生の登録を行う。ここまでは、北大の情メセンター管理のPCを利用する全ての授業に共通の必要な手続きである(詳しくは、情メセンターのHPを参照)。

次に、ALCのNetAcademyに受講生を登録する必要がある。これは、共通教育教務掛からあらかじめcsvファイルで送ってもらった当該クラスの履修者名簿に、事前に必要な加工を施して、サーバコンピュータに登録する(詳しくは、英語教育系作成「英語CALL授業マニュアル」を参照)。以上の登録作業を事前に済ませておく。各学習者に必要なIDやパスワードが与えられるので、それを個々の学習者に知らせられるように準備しておく。ここまでが、授業前に済ませておかななくてはならない必要最小限の準備である。この授業前の手続きは、共通教育教務掛との連携が重要である。第2学期は、授業開始のかなり以前に名簿ファイルが出来ているので、特に問題はないが、第1学期に関しては、年度の初めということもあり、csvファイルが授業開始ぎりぎりになることが考えられる。場合によっては、第1回目授業に間に合わない場合も考えられるので、オリエンテーションなどCALLによらない授業の準備が必要となる。登録しなくても使えるguestのIDを用いて、教材の感触に慣れさせることはできる。

5.2 TAの活用

学習者全員が、PCおよび教材の操作そのものに慣れるまで、2~3週間はかかる。例えば、情報処理教育の授業を履修し終えている学習者でも、日常的にPCに触れていない学習者は、単に画面がフリーズしただけの場合でも、自力で復活できないことがままあった。その際にTAは大変役にたった。個々の学習者のPC操作上のトラブルに全て授業担当者が対応しては、授業の進行の障害になる恐れがあるが、TAがそれらに対処してくれたので、特に授業開始時

の運営に大きなトラブルはなかった。また、成績の管理や学習者のCALL教材の進度チェックなど、ある程度コンピュータリテラシーを持ったTAは、このような授業の円滑な運営に必要不可欠であると考えられる。このようなTAのトレーニング及び恒常的な確保の体制をしっかりと整えることが重要であると考えられる。

5.3 保守管理とトラブルへの対応

平成12年度の授業運営では、コンピュータのハード・ソフト両面とも、授業運営に致命的になるようなトラブルはほとんどなかった。報告された代表的なものは、下記のとおり。

個々のPCが動かなくなることがたまにあり、他の空いているPCを使うよう指導した。これは、PCでは必然的に起こりうることであるので、つねに学習者の1割分に相当する4台のPCは、あけて置くように受講者数を調整してある。また、時間帯によって、大学のネットワークシステム内に入るのが、困難になることがあった。クラスによっては半数以上がかなり長い間、入れずにいたこともあった。情メセンターの学生認証システムのトラブルである場合が多かったようだが、この場合は授業の内容を大きく変更せざるをえなかった。このような場合に備えて、PCを中心に利用する授業では、常にリリーフ教材などの準備をし、PCを用いなくても授業が出来るようにしておく必要がある。

ハード面でのトラブルの対応は、情メセンターの受付が窓口として対応してくれた。またソフト面でのトラブルの対応は、授業担当教官の一人が窓口となり、業者との連絡をとるようにして対応した。しかし、個々の事例において、不具合の原因がどこにあるのかが簡単に特定できない場合も多く、そのような場合には、実際にその教材を利用して、教材の内容や特性を理解した授業担当者でなければ、原因究明が難しいことがある。したがって、純粋にハード面やソフト面のテクニカルサポートを担当する技術者と、PC教材を「利用する」授業担当者との間に、実際の授業運営にも通じている教官の中から、技術面にも明るいスタッフが何名かは常にいることが必要であると考えられる。今後、PC教材の種類が増えるとそれにつれて、そのような教官の数も増えてゆく必要がある。

コンピュータには、トラブルは避けられない特性

として、常についてまわる問題である。ハード、ソフト両面で、大なり小なりのトラブルは、必ず起こるものである。さらに、例えば、一時的な停電であっても、その時間の授業はつぶれてしまう。こうしたことが、紙のテキストと黒板・チョークのみを用いる授業との大きな違いの一つである。したがって、あらゆる面での組織的体系的な危機管理体制がきちんと整っていることが、CALLシステムを積極的に利用した授業を展開していく上での必須条件である。

5.4 まとめ

以上、実際に授業を運営してみて明らかになってきたことのうち、従来型の授業では見られなかった側面に焦点を当てて述べ、今後の課題、展望についても若干の私見を述べた。上からも分かるように、CALL型授業の円滑な運営のためには、部局をこえた綿密な連携が不可欠であることは明らかである。今回は、施設上の制約、教材の種類と数の制約などから、小規模な形でCALL授業を実験的に展開してみた。小規模であったがゆえに、細かな問題にも比較的迅速に対応できたともいえる。もし、今後、北大の外国語教育においてCALL型の授業を質、量ともに充実させてゆくのであれば、組織的体系的な部局間連携の仕組みをしっかりと確立して行くことが、とりわけ重要であると考えられる。

6. むすび

平成12年度1～2学期を通して、自習型CALL教材を積極的に利用した授業をのべ16クラス行い、教育効果、学習者の反応、授業運営を中心に、どのようなことが明らかになったかをまとめてみた。

教育効果については、限られた条件下ではあるが、授業時間のおよそ3分の2程度をコンピュータによる自習時間に当てた授業でも、標準テストのリスニング力を有意に向上させることができることが明らかになった。

このような形態の授業に対する学習者の反応は、ポジティブな評価とネガティブな評価にバランスよく分かれた。例えば、自分のレベルに合った教材を自分のペースで出来るという自習教材の最大の特徴は、高く評価されている。反面、自分だけでやりつづけることの難しさが、ネガティブな評価の典型であろう。一つの感触として、実力の低い学習者は、授業担当者

による指導・援助を求める傾向が強く、また、実力の高い学習者は、創造的な側面の少ないCALLによる自習に、物足りなさを感じ飽きやすいという傾向が強いように思われる。^(注9) こうしたネガティブな側面をどのようにして解消してゆくかが今後の課題といえる。

最後に、授業運営面では、従来型の授業には見られない特徴がいくつもあるのだが、授業運営を円滑に行うためには、まず、授業担当者がこのようなタイプの授業の運営に慣れ、その特徴をよく理解してより有効な授業運営を図ることが肝要である。しかし、それと同時に、TAの恒常的な確保、PCに関わるトラブルに迅速に対応できる体制をいかにしっかりと整えるかということも、重要な課題であるといえよう。これは全学レベルでの支援、協力の体制なしでは解決し得ないことであることは明らかであろう。

謝辞

本研究に協力してくださった北海道大学言語文化部英語教育系の方々、及び北海道東海大学の岡田圭子氏に感謝します。また、丁寧なコメントを下さった『高等教育ジャーナル』の査読者二名の方にもお礼を申し上げます。

注

1. CALLとは、Computer Assisted Language Learningの略であり、広い意味では、Computerを(部分的にでも)用いた語学授業はすべて「CALL授業」ということができる。例えば、課題の提出や授業担当者への質問にEメールを利用すれば、それはすでに広義のCALL授業である。しかし、本稿で問題としているの

は、学習者が自習型の教材を用いて自分のペースで聞き取りの練習をおこなうという作業を、積極的に取り入れた授業のことである。

2. CELTとは、Comprehensive English Language Testの略であり、英語を第二言語とする大学生レベルの英語力を検定する定評のあるテストである。

3. これは、当該の英語授業8コマの他に、全学教育のドイツ語、中国語、及び国際広報メディア研究科の一部の授業にも利用されているためである。

4. ()内のコメントは、自習CALL教材に対してではなく、教科書を使った授業担当者の講義解説について述べているものと思われる。

5. 進んだレッスン数・練習時間の総数を評価の一部にしたことに対する感想である。特に、時間数に関しては、教材に真剣に取り組まなくても、その教材を開けて眺めているだけでも時間数を「稼げる」ので、そのことに対する問題点の指摘であると考えられる。

6. この学習者にとっては、一冊や二冊の教材は、レベルが低すぎ、五つの教材は、高すぎるという感想であると思われる。

7. 2.4節でも述べたように、教材のライセンスの関係で、平成14年度前期現在の北大において、このALCの教材にアクセスできるのは、情報教育館3Fの2教室(52ブース)だけである。なお、平成14年度後期から高等教育機能開発センターE309教室60ブースに、さらに、平成15年度には言語文化部の二教室(各60ブース)に同じ教材が導入される予定である。

8. ALC教材に受講者登録すると、初期設定では登録日より1年間利用できる。CALL授業を履修した学習者には、そのことを知らせ学期終了後も積極的に自習利用するように勧めた。

9. この点は、今後、きちんとした調査を試みるべき課題である。